

# 開かれていく郷土

## 荒れ地を開く明治用水

郷土読本「あんじょう」安城市教育委員会編 より

### 1 用水路をつくる計画

安城ふきんには、碧海台地といわれる広い平地が広がっています。ここは、水を引くことが困難なところでした。台地には、小松やすすきなどがおいしげっていて、田や畑はわずかに見られるだけでした。江戸時代にここに住んでいた人々は、井戸をほって水をくみあげたり、ため池に水をためたりして、田畑に水を入れていました。箕輪村では、27ヘクタールの田畑に水をかけるために、20ヘクタールのため池と103の井戸をほっていました。それでも晴れの日が続いたりすると、池の水が足りなくなって、人々は、夜通し井戸水をくみ上げなくてはなりませんでした。

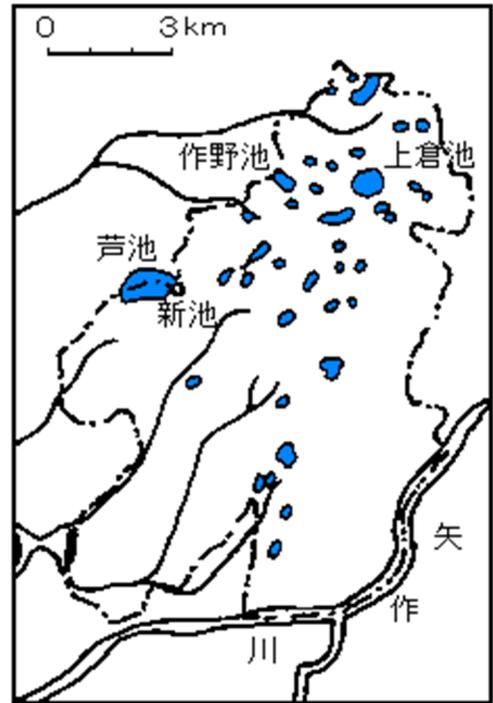
このようにたいへん苦勞して、米、麦、あわ、大豆、わた、などの作物をつくっていました。それで、人々は、いつも水がほしいと、心からねがっていました。

今から250年ほど前、和泉村に、地主で酒づくりをする都築弥厚という人がいました。弥厚は53才のころ、安城ふきんの台地に、矢作川の水を引くことができないかと考えました。そのころ、高棚村に和算にくわしくて、測量のじょうずな石川喜平という人がいました。弥厚は喜平に、矢作川から用水をひく計画を話し、協力を求めました。喜平は、よろこんで協力することをやくそくしました。

弥厚は、用水路の計画をすすめるには、この地方を治めている多くの役人に、ゆるしを受けなければなりませんでした。また、思いがけない反対も起こってきました。ため池や井戸から、田に水を引いていた村の人々は、「用水路を作ると、水があふれて水びたしになってしまう。」と心配したり、用水路ができて、小松原が田畑になると、まき集めや草かりができなくなると考えたりしたからでした。このため、昼は測量ができなくて、夜になってから、測量することもありました。



弥厚たちは、このように苦しみながらも5年あまりかかって、用水路の測量を終えることができました。そこで、用水路をほる計画図をもって江戸(東京)へ行き、幕府に用水路をほる計画やお金をかりることをねがい出しました。



ため池のあったようす

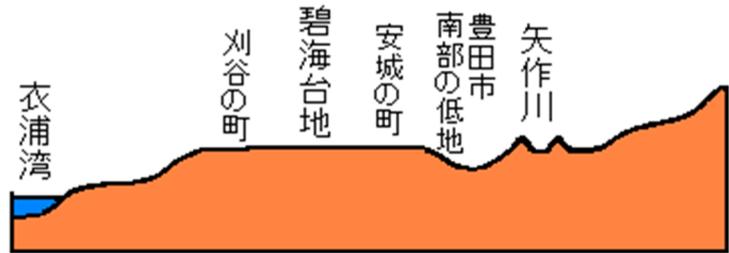
しかし、計画についてのゆるしが出た年、弥厚は長い間のつかれがもとで病気になり、用水路の計画図と借金を残してなくなってしまいました。

## 2 計画を受けついだ人たち

弥厚がなくなって40年ほど後、城ヶ入村石井(石井町)で開こんをすすめていた岡本兵松は「この台地には、用水路がどうしても必要だ。」と考えました。それで弥厚の計画図をもとにして、用水を開くねがいを県庁に出しました。

同じころ、阿弥陀堂村(豊田市)の地主、伊予田与八郎は、村の田に流れ込む水をすてるために、碧海台地をほりわって、衣ヶ浦湾へ流すはい水路を作るねがいを県庁に出していました。

これらの計画を知った県の役人のすすめで、ふたりは、協力して二つの計画をすすめることにしました。しかし、はい水路の工事は、むずかしくてできないことがやがて分かりました。それで、途中から、用水を開く仕事だけをすすめることにしました。用水を作るお金は、ふたりが苦心してかりて歩きました。1879年に工事は始まりました。くわで土をほり、もっこで運び出すというように、人の力だけで行いたいへんな仕事でした。



土地の断面図



1880年には、中井筋、東井筋に水が流れはじめました。つぎの年、この用水は、明治用水と名づけられました。用水路の工事は、その後も続けられて、三つの大きな流れが台地を通るようになりました。また、何本もの支流も作られて、いまでは、8000ヘクタールの田が、この用水のめぐみを受けています。明治用水ができて、ため池や荒れ地は、田にかわっていきました。しかし、新しい田はやせていて、あまり多くの米はとれませんでした。そこで、福釜村の杉浦

源右衛門は、土地の税金をおさめなくてもよい年数をのばしてもらうように努力しました。

明治用水のおかげで、以前のような水不足による苦労や日でりの害はなくなりました。そして、農業のさかんな土地として、発てんすることになりました。

## 3 明治用水とともに

明治用水の水が利用されるようになると、さらに多くの土地が開かれて村ができました。そのおもな所は、今の「東山」・池浦町・緑町・美園町・石井町などです。しかし、土地がやせていたので、わらばいやたいひにするごみを海部郡や岡崎市から運ぶこともありました。また、れんげ

を育ててこやしにすることもさかんに行われました。

明治のなかばすぎごろになると、農事試験場が安城におかれしました。ここでは、稲の品種かいりょうをしたり、ひ料の使い方などのしどうをしたりしました。また、進んだ農業をする人を育てる農林学校ができたのもこのころです。この学校の最初の校長であった山崎延吉は、生徒や農民に新しい農業の仕方を教えました。

この考えを受けた岡田菊次郎たちは、安城町農会で活やくしました。この農会は、にわとり・かいこ・野さい・くだ物などの組合の仕事や生産を高める技術のしどうをしました。こうして、なし・もも・すいかなど

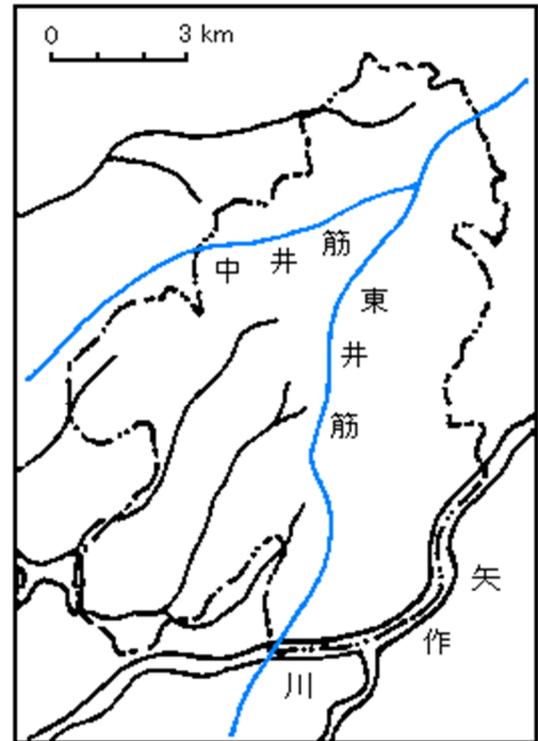


のくだ物や野さいが多く作られるようになり、共同で東京などへ送り出していました。やがてこの町農会のほかに、いくつかの産業組合もできました。

昭和の初めになると、にわとり、乳牛、ぶたなどをかう農業がさかんになりました。板倉農場はその代表的な農家でした。この安城の農業の仕方は、「多角形農業」といって、全国的に知られるようになり、この地方は日本デンマークといわれるようになりました。

用水ができた記念碑に「この水で田が多くなるだけでなく、水車をまわしたり、用水を運河に利用したりすることができる。」と書いてあります。このころ、水車を使って糸を作る工業がさかんになってきたので、明治用水の水で糸を作る工場ができると考えたのでしょう。そののち、水車を使う工場は作られませんでした。

しかし、今では、工業用水が一日8万トン流れています。そのほとんどは、衣浦りん海工業地域で利用されています。明治用水は、運河には、利用できそうにありません。現在、明治用水のほとんどは、地下水路になったからです。直径3メートルもあるくだがうめられています。そのため、人々がきたない水を流しこまなくなりました。水道と同じようなせつびにすれば、必要な水に必要な時に使うことができ、水のむだをなくすことができます。このように、明治用水は、農業用水ばかりでなく、工業用水としても使われるようになりました。



明治用水水路図